

徳川家康朱印状と東照宮

伊奈波神社教学研究員

寛 真理子

慶長五年(一六〇〇)の関ヶ原の合戦ののち、美濃国奉行となった大久保長安は慶長六年に五方条の法度を、翌七年に徳川家康は伝馬朱印状を発給しました。わずか二通の文書ですが、これが江戸時代をとおして岐阜町の「諸役免許」つまり労役や雑税を負担せずにする特権を保証する根本証文となったのです。

この二通は、当初は岐阜町役人の筆頭である惣年寄を勤めた加納久左衛門家が、のち同じ惣年寄であった賀島清左衛門家が預かり、さらに十八世紀末には岐阜奉行所に移されていました。奉行所では御朱印蔵を建てて納めました。その階下を役所書類の倉庫として使っていたところ手ぜまになったので、寛政六年

(二七九四)に御朱印蔵を東の明き地へ移し、跡地に文書保管用の土蔵を造りました。

この御朱印蔵は二通の文書を納めるだけでなく家康の神霊を祀る神殿でもあり、家康命日の四月十七日には毎年祭事を挙行していたと伝えま

す。蔵の内部は、金壁に十二支と亀鶴を描いて美しく装飾されていました。文政十三年(一八三〇)に尾張藩から「岐阜東照宮」へ「東照大権現」の文字を染付けた一对の瓶子が渡されており、尾張藩もこの御朱印蔵が単なる倉庫ではないと考えていたことを示しています。『岐阜米屋町史』(昭和十年発行)に載る幕末の奉行所構内見取り図には、稲荷山ふもとに「東照宮御朱印倉」が鳥居とともに描かれて

います。

しかし時代が明治となり尾張藩の岐阜奉行所が廃止されると、この二通の文書は伊奈波神社に移されます。これがいつごろかはつきりしませんが、明治十二年(一八七九)ではないかと思われま

す。この二通は伊奈波神社宝物リストにこの二通は含まれておらず、明治十二年に初めて宝物として姿を現すからです。この年九月には、岐阜町会議の協議にもとずき旧岐阜奉行所御朱印蔵を修繕して愛宕神社(伊奈波神社摂社)境内に東照宮を創建し、二通の文書を納めました。これも、文書が移されたからではないでしょうか。金五〇円が東照宮維持基金として設定され、その利子で祭礼や修繕をする予定で、この年九月十六・十七日には東照宮創建臨時祭典が挙行されました。なお、同年十月に岐阜町市民総代たちが旧尾張藩主の徳川慶勝に家康遺品の寄贈を依頼し、家康着用の袴が奉納されて神宝となっています。明治十八年の虫干し神事には家康の朱印状・袴、長

御朱印これ無くして人馬押し立つる者あらば、その町中出合い打ちころすべし。もし左様にならざる者あらば主人を聞き届け申すべき者なり」という本文が続いて慶長七年三月七日の日付がしるされたものです。慶長七年は中山道が整備された時期で、御高宿(岐阜県可児郡御高町)などに宛てた同じ文面の朱印状も残されています。「打ち殺すべし」とは穏やかではありませんが、関ヶ原合戦直後の荒々しい雰囲気伝わってきます。

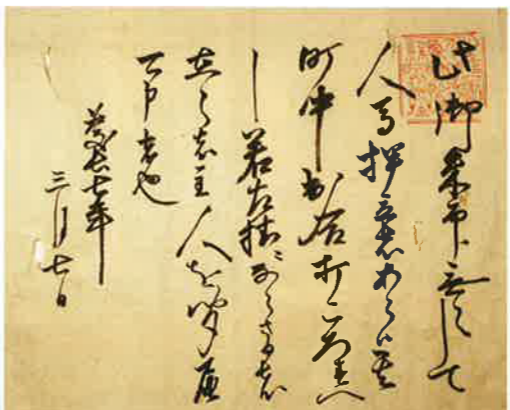
こうして伊奈波神社境内に東照宮が鎮座したわけですが、実は近代岐阜町の東照宮にはもつと複雑な経緯がありました。明治十二年に伊奈波神社境内に東照宮を祀った(東照宮①)のは前述の通りですが、その三年前に日光東照宮の承諾を得て丸山神社に東照宮が合祀されました(東照宮②)。丸山神社は伊奈波神社の摂社で、今も金華山ふもとの丸山に鎮座します。ところが明治二十年六月には西荘村(現在は岐阜市)の立政寺の家康像を公園内の神道中教院に仮遷

座しました。このときは途中で東照宮①で休憩し、伊奈波神社から神輿も貸し出しています。社殿新築の予定といい、明治二十三年の「岐阜みやげ」で公園内に「東照公の祠」があるという記述から、社殿が建造されたのは確かです。このころの公園内東照宮の信徒総代が判っていますが、いずれも旧岐阜町の二十〜三十歳代の若者たちです。ちょうど岐阜公園の整備が進められた時期で、その一環として若者組が勧請したのかもしれない。場所は東照宮②とは異なり、現在の加藤栄三・東一記念美術館のあたりと思われ、祭祀は中教院が受け持ったようです(東照宮③)。これは明治四十三年に権現山の峯本宮に合祀され、建物も移築され峯本宮の社殿となりました。それ以前に伊奈波神社では東照宮の例祭を六月一日・二日と二度執行しており、これは東照宮①②の祭事でしょう。ところが東照宮③が峯本宮に合祀されたのちの明治四十五年には「境内鎮座東照宮」「玉垣内鎮座東照宮」「峯本宮合祀東照宮」の三座で

祭典があったのです。ややこしい話ですが、東照宮②がこれ以前に伊奈波神社境内に遷座したものなのか、現在はこれ以上解明できません。大正三年(一九一四)の東照宮祭典は六月一日に二座で行われています。それにしても、近代になってこのように複数の東照宮が創建されるのは、家康が江戸時代の岐阜町に特権を付与してくれた人物として岐阜町民に親しみがあつたからなのでしょう。祭礼も盛んなもので、神事のほかに獅子舞や手踊りを奉納し、参詣者にぎわいました。特に権現山に東照宮③が合祀されてからは盛り上がりおこり、笹土居町では家ごとに商品や道具を使った造り物を飾り、生き人形・浪花節などの興行や狂俳の会・献燈もあり、権現山上に参拜できない老幼のためにふもとに奇抜な遥拝所も設けられました。大正四年は家康の三百回忌にあたり、権現山には東照宮拜殿が新築されて

安法度も会場に並べられました。また、祭日は明治二十年ころに六月一日に変更されています。これは家康が没した元和二年(一六一六)四月十七日(新暦では六月一日に当たったため)で、日光東照宮の祭日に合わせたものとい

います。ところが、明治二十四年の濃尾震災で、二通の文書も袴も東照宮社殿とともに焼失してしまいました。幸い伊奈波神社には家康朱印状の透き写しがあり、現在もそのようすを知ることができます(写真左)。冒頭に馬を牽く人物を描いた朱印が押され、「この



三百年祭と拜殿落成式の餅投げや獅子舞、人形などの催しもありました。大正七年の例祭も昼夜ともに余興が奉納される賑やかなものでした。現在も権現山の峯本宮には東照宮が合祀されており、石標に「摂社峯本宮 合祀東照宮」と刻まれています。また伊奈波神社境内の東照宮は昭和一〇年に神門下の現地に遷座し、須佐之男神社・天満神社・和歌三神社と四社合殿で静かに祀られています(写真左)。

